SXb16とC地区SX1100の間は、水域で分断されていたとみられるが、南東側の丸の内町地区ではⅡ－5期の安定した地盤が検出されているため、この水域は入江状に湾入していたか、あるいは若干北側の中堀付近を経て東浜側に繋がっていたかの、いずれかの可能性が考えられる。その当否を判断する材料は乏しいが、前者の可能性を考えておく。

一方、SXb16・SX1100の西側には浜ノ町遺跡が位置する。浜ノ町遺跡で検出された中世遺構の主軸は、『高松城下図屏風』で描かれた西浜村から浜ノ町に至る海岸線とほぼ平行しており、南西－北東方向に延びる砂堆上に遺跡が位置していると考えられる。『小神野夜話』では、付近は西からの波風が著しく、武家屋敷を引き払ったと記載されており、近世段階でも砂堆の形成作用が進んでいたことを窺わせる。その上限は明確でないが、遅くとも中世Ⅱ－5期には安定しており、SXb16・SX1100と西側の瀬戸内海とを遮断していたと捉えて間違いないであろう。したがって中世の船着き場は、浜ノ町の砂堆背後に湾入した後背湿地（潟）に構築されたことになり、十三湊や博多・安濃津と同様な立地条件といえる。SXb16からSX1100への船着き場の移動は、潟内の埋没が進んだことに起因すると考えられ、SX1100付近も13世紀後半頃（中世Ⅱ－4期）には機能を失ったとみられる。

西の丸町B・C地区では、SXb16・SX1100の廃絶後は近世まで遺構が認められない。一方、これと入れ替わるように、浜ノ町遺跡・高松城跡丸の内町地区で中世Ⅱ－5期の生活遺構が出現する。東ノ丸跡県民ホール地区も、同様に捉えられる。その後、築城に至るまで①浜ノ町遺跡周辺地域と②東ノ丸から片原町にかけての地域では遺跡群の展開が認められ、中世後期の「東浜」「西浜」という地域単位へと繋がる、というのが現段階での粗い見通しである。一次史料ではないが、『南海通記』や寺伝などを参考にすると、おそらく西浜・東浜それぞれに小領主の居館や寺社があったと推測される。港湾関連施設は、そのいずれかないし両方に移転した可能性があろう。しかしこれらをより具体化していくためには、城下での中世遺跡の調査実績の蓄積と、港湾の位置も規定したであろう香東川の旧河道の復元など、残された課題はまだ多い。

第6節　監獄署における窯業生産

1. 明治期の香川県監獄署と手工業生産

明治5年（1872）2月、高松城西外曲輪に囚獄・徒刑場が置かれた。その後、呼称は明治8年（1875）に懲役場、同10年（1877）に高松監獄、同21年（1888）に香川県監獄署などと度々変わったが、明治31年（1898）に現在地（高松刑務所）に移転するまで、西外曲輪に設置されていた。

明治前半期の監獄労働は、本格的な工業化以前には外役主義の立場から、集治監中心の大規模産業（道路工事、炭坑・鉱山労働）の先鞭として位置付けられていた。その後、明治20年代に外役から内役(監内作業)が主流となるが、安い労働力ということもあり民間業者の生産を圧迫することもしばしば起こった。高松監獄では、囚徒170人で行わせた傘製造（年間84,000本の生産）による市場独占が問題となった。明治25年（1892）には、市長・県知事と民間業者からの苦情を受け、以後は監獄からの払い下げ直販をしないということで交渉がまとまっている（重松1985)。

また明治27～31年には、10代目理平が授産の目的で監獄署において技術指導を行っているとされる（森下2002)。理平はその頃、監獄署に程近い錦町で煉瓦生産も行っているとされており、明治33年に栗林で窯を再興するまで、経営の自立化による収入の確保を試行錯誤していたと考えられる。おそらく監獄署での技術指導には、監獄署側からの要請とともに、理平側の何らかの意図も働いていた可能性がある。しかし具体的な問題として、理平と監獄労働との関わりは、(あったのかなかったのかも含めて）全く検討の対象から外されていた。当該調査区SXb01・02出土の窯業関連遺物（明治廿六年銘木簡と共伴）の検討から、その問題に取り組むことは可能であろうか。

2. 器種と生産技術の特徴

2. 1. 生産器種と窯構造

生産器種　焼成不良品・他器種の釉薬の付着・素地の存在・窯道具との融着などにより、監獄署で生産されたと見なし得るのは、以下の5種である。

①磁器。煎茶碗・蓋付碗・酒杯・鉢・急須・徳利などがある。②陶器。極めて少ないが、軟質陶器に近似した釉薬を掛ける碗がある。③軟質陶器。火入れ・植木鉢・鉢・行平鍋・土瓶・急須・蒸し器・羽釜など。④土師質土器。焙烙・焜炉・蛸壺・人形がある。⑤タイル。土塀瓦ないし桟瓦状に同一規格を組み合わせる

もので建築材とみられる。表面側は施釉される。

窯構造　築窯材・窯道具ともに多量に出土しており、それらの組み合わせから推測できるのは、次の２種の窯構造である。

①登り窯。築窯材としては、トンバリ（通焔口・側壁・基底部の構築材）、瀬戸でいう「クレ」（生粘土を煉瓦状にしたもの）、円柱形で側面に刻みを入れる土製品（京焼の「クレ」。天井構築材）、色見穴がある。また窯道具には、匣鉢（丸形・角形）、匣鉢蓋、トチン類がある。京焼の「クレ」に似た方柱状土製品もあり、粘土の付着が認められないことから築窯材でなく、棚板支柱などの可能性が考えられるが、棚板は出土していない。この他、床面に敷かれた砂が硬化したものもある。なお、焼成室の数は明確でないが、後述する桶窯では磁器素地の素焼きを示す形跡がないことから、登り窯での素焼き室の存在が想定されるため、単室ではないと考えられる。短期間の操業にもかかわらず、築窯材・窯道具の廃棄量が多い点、またトンバリの被熱状況にばらつきがある点からも、焼成室は複数あったとみる方が妥当であろう。

②桶窯（木立 1997・宝雲舎ほか 1976）。築窯材としては、壁面が丸く弯曲する焼土塊（焼成部の壁体）、筒状土製品（京焼の「柱」：間仕切り支柱か）、先端が狭まる方柱状土製品ならびに細長い板状土製品（京焼の「矢」：間仕切り材）、円盤を分割した幅広の間仕切り材、などがある。被熱・変色の状況をみると、間仕切り材の構成には、ａ．方柱状土製品を放射状に渡し、その上に円盤分割板を乗せて焼成部床面とする場合と、ｂ．板状土製品を放射状に渡し、その上面を焼成部床面とする場合があったようである。ただしいずれの場合も、その下部を構成する支柱や「リウズ」（輪状を呈する間仕切りの支え）との組み合わせ方法については明確でない。

2. 2. 磁器の生産技術

胎土と化粧土　素焼き段階の個体のほとんどは、高台畳付を除く器面に白色ないし灰白色の化粧土が施されている。素焼き素地は黄白色から黄褐色を呈しており、やや鉄分などの不純物を含む陶石が使用されているようである。化粧土は、良質な磁器の質感を出すために施されたと考えられる。本焼き製品の断面をみると、化粧土と素地との境界は明瞭でないが、素地の露出する高台畳付付近は色調が異なっており、化粧土の効果が出ている。

成形と絵付け　碗や酒杯など小型器種には、体部から底部にかけての器壁の厚さに関して、ばらつきがかなり明瞭に看取できた（第４章第１節1. での形態①～③）。既述したように、生産は僅か４年程の限定された期間とみられるため、この差異を年代差に置き換えることは難しい。窯に伴う廃棄資料とはいえ、本焼きを行っているということは、こうした同一形式でのバリエーションを前提に生産が行われていたことを示唆している。その要因は、ロクロ水挽き時と高台削り出し時の２度の成形工程における、製作者の技量の差異に求められよう。

また絵付けには、手慣れた熟達した絵付け①と、稚拙な筆使いの絵付け②がある。両者は截然とした区分ではなく、中間的な筆致も存在することは、形態①～③と同じである。均整のとれた素地に、手慣れた絵付けが必ずしも対応するわけではなく、むしろ近似した筆致が形態差を超えて認められる方が一般的である。

以上のように、成形・絵付けともに製作者は熟練した水準にある者だけではなく、非熟練者もかなりの比率で含んでいることが窺える。本格的な量産を行った陶磁器窯との比較はできていないが、感覚的には通常の生産よりも製品のばらつきが大きいように見受けられる。

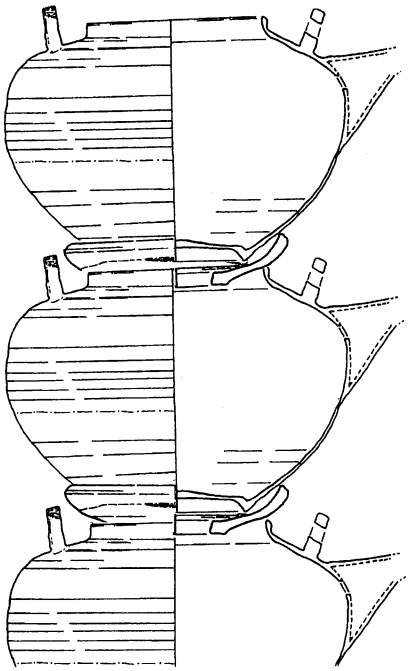
窯詰め　登り窯による本焼き段階では、焼成品は全て匣鉢に入れられたようである。焼成品は、直接匣鉢底面には置かれず、薄い円盤状トチン（センベイ）をかませる。小型品（煎茶碗・酒杯・蓋付碗）は丸形匣鉢に、大型品（鉢・徳利）は角形匣鉢に入れられる。徳利は角形匣鉢２個を合わせ口にして入れられる。匣鉢は積み重ねられ、角形匣鉢の最上段には匣鉢蓋が被せられ、その上に丸形匣鉢が乗せられる。なお匣鉢の素材（胎土）には、粘性の強い陶器質のⅠ群と、砂粒を多量に含む土師質気味のⅡ群がある。Ⅰ群は丸形のみで、Ⅱ群は丸形・角形の２者がある。匣鉢片転用の匣鉢詰め具が全てⅠ群であることから、操業当初はⅠ群匣鉢が用いられ、遅れてⅡ群が採用・普及した可能性があろう。

2. 3. 軟質陶器の生産技術

釉薬と素地　２者存在する。一つは硬質の素地をもち、赤色系の釉薬を掛けるものである。もう一つは軟質な素地に黄褐色ないし銀色に発色する釉薬を掛けるものである。前者は行平鍋・土瓶・急須・羽釜など、大多数の軟質陶器に認められ、後者は火入れなどの限られた器種に認められるだけである。

成形　磁器で指摘できた、同一形式内での技量のば

（天地逆の可能性もある）



第 27 図　想定される窯詰め形態

らつきは、軟質陶器には見出せない。行平鍋・土瓶ともに回転ヘラ削りによる、極めて薄作りな器体でまとまる。

窯詰め　軟質陶器の本焼きは、特徴的な赤色系釉が桶窯間仕切り材に分厚く付着することから、桶窯での焼成は確実である。また、赤色系釉が付着する焼き台（283 ～ 285 のタイプ）の下端に砂が付着するものがあることから、砂床を伴う登り窯での焼成も認めてよいであろう。ただし、匣鉢に赤色系釉の付着した事例がないこと、また軟質陶器の匣鉢内での融着例がないこと、などから登り窯での焼成は磁器とは別の焼成室で行われたことが推測できる。赤色系釉の付着が桶窯間仕切り材でかなりの頻度でみられることから、おそらくは桶窯での焼成が主体であったと考えられる。

窯詰めで多用されたとみられる窯道具が、上面（底面）中央を穿孔した杯形の焼き台である（283 ～ 285）。法量から土瓶用と考えられ、焼けムラや融着例から、第 27 図のような重ね積みが復元できる。

2. 4. 土師質土器の生産技術

焙烙の成形・調整　明治前半期の御厩系（産）焙烙は、全面的に外型成形への転換が行われているが、監獄署で生産された同系譜の焙烙は、これとはかなり異質な成形技法を伴う。

まず大半が、紐作りによる点である。御厩では放棄された古い技術が残存していることになる。

また、極少量存在する外型成形品が、御厩とは全く異なる技法に立脚している点も注目される。御厩での外型成形は、型からの剥離材として砂が用いられるが、監獄署ではキラコが用いられている。その上、監獄署の焙烙は伝統的な形態（ＡＩ形式）の外型成形であり、御厩産焙烙でみられたＡＩ形式（紐作り）からＡⅡ形式（外型成形）へという、形態変化を辿ることができない。なお外型成形の個体でも、215 のように型から外された後に外面を板ナデ調整するものがあり、この点も型粗面を無調整とする御厩産焙烙とは異なる。

蛸壺の成形・調整　蛸壺は、器体を縦方向に分割する割型成形の痕跡（縦方向のバリ）が明瞭であり、割型（外型）も出土している（232 ～ 235）。割型は、内面に粘土紐の接合痕を顕著に残すため、原型の存在が想定できる。しかし、型は分割線（切り込み）の内面側が焼成後の分割を示す破断面をなし、未分割品もある（233）。原型は焼成前に取り外されたと考えるのが自然なため、その形状については検討の余地があろう。

調整痕をみると、内面には板ナデないしハケ目が施され、口頸部内面ではそれを消去する回転ナデが認められることから、現存生産地同様、ロクロ（回転台）上に割型が固定されていたと考えられる。なお外面調整（板ナデ・ハケ目、横ナデ）は型から外された後に施されており、外面は基本的に無調整の現存生産地製品とは異なる。

人形の外型　干支などを象った土製品（人形と総称）は、外型が比較的多く出土している。そのうちの１点（247）に「カンゴク」とヘラ書きされることから、監獄署で使用されたことは明確である。また、原型も少量出土している（236）。中には人形ではなく、土瓶の把手（246）やカップの把手（248）、鉢ないし瓶（251）などの外型や、注口ないし把手の原型（237）と外型（238）も出土しているため、置物の他に容器やそのパーツの製作にも外型が多用されたことが窺える。

窯詰め　土師質土器には、素焼き段階での磁器器面の化粧土の付着例がない。登り窯での素焼きが皆無かどうかは明確にし得ないものの、大半は桶窯での焼成と考えられる。ただし、焙烙には 206･212 のように軟質陶器の釉薬が付着したものがあり、これを①軟質陶器との同時焼成、②軟質陶器焼成の際の破片転用道具としての使用、③間仕切り材付着の釉薬の再溶融・付着、のいずれの形跡と捉えるかが問題である。仮に①であれば、道具を使用した軟質陶器との同時窯詰めを考慮する必要があり、窯内容積の狭い桶窯でそれが可能だったかどうか検討の余地があるからである。

1. 系譜

3. 1. 製品

磁器　主要な器種である①煎茶碗＋急須、②酒杯＋徳利、③蓋付碗、④鉢の４品目のうち、③については肥前系磁器碗に比較的近いともいえるが、他は肥前系との直接的な系譜関係を想定することは難しい。また富田などの在地窯（森下 2000）でも類例に乏しい。

①･④は、形態的な要素とともに、絵付け方法に京･信楽系との近縁関係をもつ可能性がある。これらは大半が呉須による染付であるが、鉢の一部は錆絵主体で呉須を併用したり（172）、鉢・徳利の一部に白泥で梅花を表現する（182）などの描法が認められる。京･信楽系陶磁器の類例の検索が不十分なため具体的な比較は難しいが、一例としては白泥による花の表現は、桜花を表現した２代目道八の作品（特に雲錦手鉢）中に見出すことができる。なお 10 代目理兵衛（理平）は、３代目道八の下で修行しており、雲錦手鉢も製作している（豊田 1980）。

この他、①・④に共通するのは、技量の差異はあるものの、風景（山水）・花・梅樹・蝶などの繊細な画材や、漢詩・和歌をあしらった絵付けが行われている、という点である。特に煎茶碗は、小型品であるにもかかわらず外面に緻密な絵付けがなされており、京焼の煎茶碗に似た趣ともとれるが、個別の比較は今後の課題とせざるを得ない。

軟質陶器　近世の在地における軟質陶器生産は、不明な部分が多い。19 世紀前半に三谷林叟が屋島で楽焼を始め（屋島焼）、近代にかけてその系譜を引く生産がある（陶浜焼・祖舜焼。豊田 1980）。空港跡地遺跡Ｆ地区では、「屋島」刻印の行平鍋蓋が出土しており（佐藤 2000）、監獄署の製品（193）と極めて似るが、年代を限定する材料に欠ける。また香西・富田では、近現代に「薬土瓶」の生産が行われていたが、その上限については明確でない。他地域での類例、あるいは高松城跡近世遺構での出土傾向を勘案すると、19 世紀初頭～前半に赤色系釉薬を用いる土瓶・行平鍋が出現し、幕末にかけて増加していく、と捉えるのが妥当であろう。したがって、監獄署での軟質陶器の生産は、幕末段階での流通の増加あるいは在地窯の稼働を承けて成立したと、想定しておきたい。

土師質土器　焙烙は既述したように、御厩産の系譜を引くものであるが、①大半が紐作りのＡＩ形式であること、②外型成形のものも剥離材にキラコを使用しており、形態がＡＩ形式と共通していること、の２点において同時期の御厩窯製品とは異なる。

蛸壺は、近世段階の良好な比較資料に欠ける。現存蛸壺生産地では、割型成形は鍋谷（宇多津町）や堀越（山口県防府市）で認められる技法であり、明石ではロクロ挽きである。これらの生産地での上限が明確でないため、蛸壺への割型成形の採用時期と伝播過程は不明である。しかし在地産焜炉（涼炉）は、若干先行する時期（19 世紀中葉～後葉）に外型（おそらく割型）成形に転換しており、回転台との併用も想定されることから、蛸壺への割型成形採用の技術的前提をなす可能性がある。ただし焙烙で明瞭に指摘できるように、御厩窯との技術的な「没交渉」状態は固定的とも考えられるため、他地域からの影響関係を想定したい。その際、当面の課題となるのが、鍋谷での蛸壺生産の上限の問題であろう。鍋谷は旧東分村に属しており、同じ村内の吉岡（丸亀市）は、既に幕末段階で「甕焼師多し」（『西讃府誌』）とされている。おそらく鍋谷での土器生産は、吉岡からの系譜を引きつつ、ある時点で蛸壺に特化したと考えられるが、それが監獄署での蛸壺生産より先行するのか、後出するのかを追求する必要がある。

人形　人形（土製置物）の生産は、高松では「奉公さん」と呼ばれる素焼き着色製品が知られる。しかし、それが近世の土人形の系譜を直接引くものなのかは明確でない。また監獄署での生産との関わりも、全く今後の課題である。

3. 2. 窯構造と窯道具

登り窯　天井構築に用いられた刻み入りの円柱形土製品は、在地窯である谷窯跡（白鳥町：19 世紀前半）や吉金窯跡（大川町：18 世紀中葉～ 19 世紀）では確認できない。類例として挙げ得るのは、京都・五条坂に現存する藤平窯（戦前の構築）の天井構築材である（ＣＤ編写真）。京焼の窯築師の話では、修行期には築窯よりも大桁・クレなど構築材の製作を行っていたとされるが、この証言にみえる「クレ」は「直径九センチ、長さ十八センチくらいの円筒形で、窯の天井の部分に使う」（田村 1988）とされており、藤平窯などでの使用状況を考慮すると、円柱形土製品に該当する可能性が高い。一方、肥前系製品を焼いた高浜窯（熊本県）では、安政４年（1857）再興とみられる高浜Ａ窯がトンバリによる天井構築である（松本 1980）。監獄署における登り窯は、天井構築方法は京焼（京・信楽系）に近いといえる。

窯道具も、京・信楽系と共通するものが多い。①環状粘土紐（270）、②粘土円盤（272 ～ 274･276）、③脚付環状品（277 ～ 279）、④中央部穿孔の杯形品（283

～285)、⑤④に近似し抉りを入れる王冠形品（282)、⑥器高の高い円筒形品（280・281）は、京・信楽ないしその系統の窯で確認できる。また、⑦断面台形状の円盤品（ハマ）は、肥前系でも確認できるが、扁平度の強い形態（275）は京焼の現存例の規格により近い。また、⑧窯構築材としての「クレ」よりも長い柱状製品（292）も、近似例が藤平窯でみられる。

以上、窯構築方法と窯道具は、多くの要素が京・信楽系と共通し、肥前系とは異なることが指摘できる。

桶窯　桶窯の系譜は、大枠としては古代後半に出現する煙管状窯からの流れを想定できよう。ただし、近世での桶窯の系譜には、①陶器の素焼き窯、②土師質土器・瓦質土器の焼成窯、としての形態がある。ことに①の場合、具体的に陶器生産に取り込まれる過程は、明確でない。また陶磁器生産の拡散・変容過程において、同じく円筒形の窯体（外窯）と内部の窯室（内窯）をもつ錦窯（上絵焼成窯）との関わりの有無も、十分には追求されていない。現状では、①・②と錦窯の3者の系譜関係の整理が、重要な課題といえる。

上記課題に対して、筆者も十分な見通しをもっていないが、2. 1. で想定したような2つの間仕切り構成は、京焼の素焼き窯や伏見人形焼成窯で類例が見出せる。a. は伏見人形の丹嘉窯（木立1997）で同一例が見出せる。b. は粟田の素焼窯(第29図:京都府1872・木立1997）と同一である。一方、讃岐地方の在地土器窯としては、御厩の「圓窯」（高橋1987）が桶窯とみられるが、内部構造は明確でない。この点が今後の課題となるため、ここでは系譜を明示できないが、取り敢えず京都ないし在地の系譜で捉えておきたい。なお、三叉トチン状品（286・287）は、京焼の楽焼き用の素焼き窯で用いられる道具と同じである（宝雲舎ほか1976)。また登り窯での窯道具③～⑥は、軟質陶器ないし土師質土器が多いSXb02で多く出土する傾向にあることから、むしろ桶窯主体の使用が考えられる。

この他、関東地方の事例であるが、軟質陶器土瓶・行平鍋の焼成には、桶窯の使用が認められる（中野1998)。

4. 今後の課題

3. 1. 操業形態

以上のような多様な系譜をもつ製品が、監獄署に寄せ集められ、生産されたというのが、窯業関連遺物の特色といえる。ところで既述したような、製作技法のばらつきが顕著な磁器と、さほどばらつきのない軟質陶器・土師質土器という違いは何に起因するのであろうか。監獄署の後身である高松刑務所には、関連資料が残されていない(戦前の資料は戦災で焼失)。そこで、より詳細な遺物の観察と類型化が課題となる。

まず、両者の差異を製作者の技量の差異として捉えられるかどうかが問題である。磁器生産については、技量の差異が大きい状況を想定しても大過ないであろう。一方、軟質陶器・土師質土器の生産では、技量的なまとまりが一定水準に達していると捉えられるかどうか。軟質陶器土瓶・行平鍋の薄作りは、一定水準の技量の裏付けによると見なさざるを得ない。これに対して土師質土器は、焙烙が御厩系焙烙よりも厚手な作りであること、また蛸壺が外型成形のため技量差が目立ち難いこと、などから評価が難しい。

また、仮に技量差が存在するとした場合、監獄署内でどの生産工程が行われたのかが問題となろう。磁器の場合、素焼き品の焼成状況にばらつきが認められるため、それ以前（すなわち成形工程）から本焼きまで一貫して監獄署内で行われたと捉えることが可能である。蛸壺も、外型が存在するため、全工程が監獄署内で行われたと捉えられ、同じ胎土・焼成をもつ焙烙も一応同様にみてよいであろう。問題は軟質陶器で、技量差の少ないことの解釈として、①素焼き製品が監獄署に搬入された、②生産者が監獄署内に赴いて成形・調整工程を行った、③監獄内労働力が熟練の域に達した、の3つのケースが想定される。しかし、遺物の観察からのみでは、どれが妥当な解釈なのか判然としない。当時の監獄労働の実態（特に民間業との関わり）の検討から、より妥当な解釈へと導かれるべきだろう。

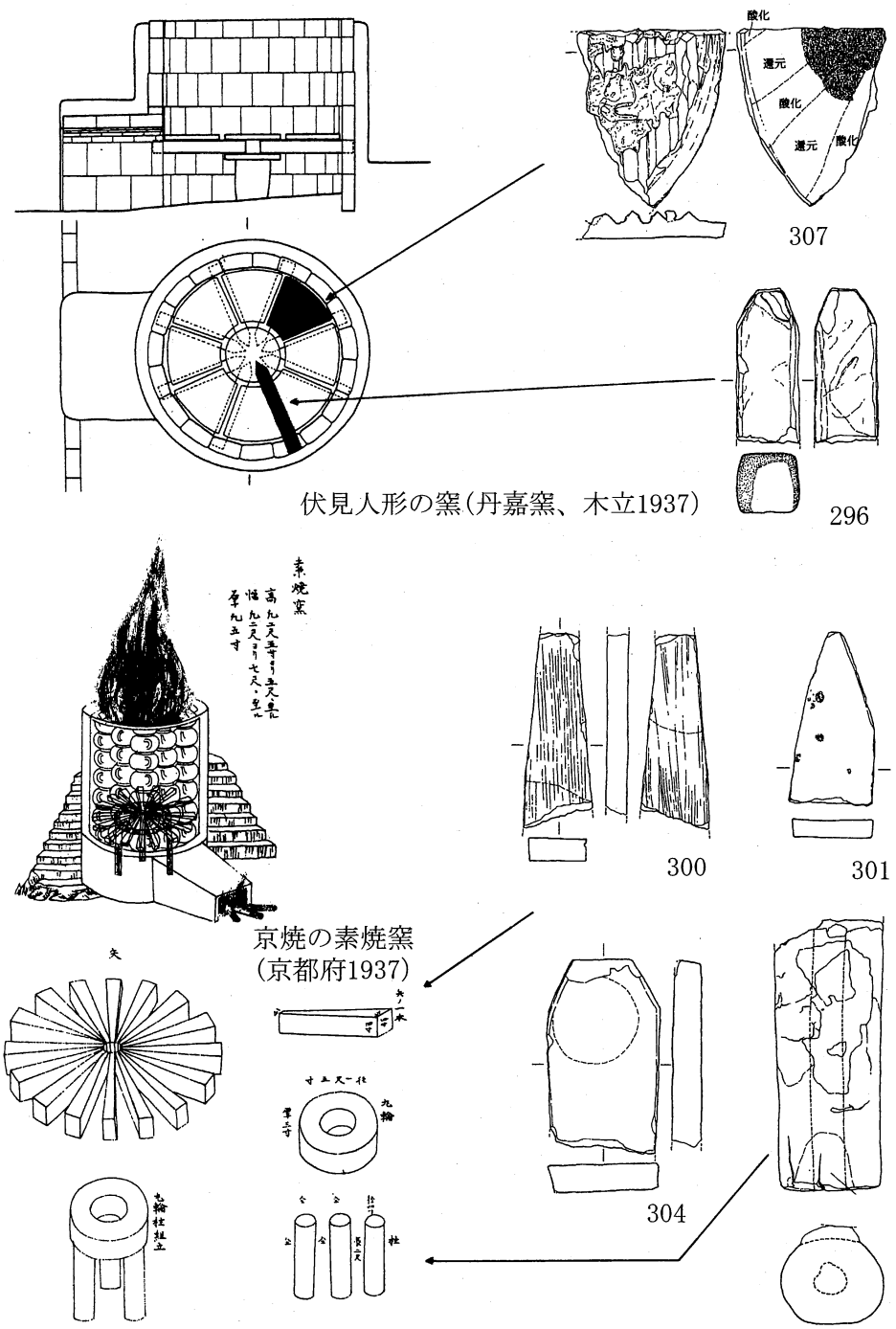
3. 2. 理平の役割

磁器を中心にした京焼（京・信楽）系の技術の存在ないし応用は、京都で修行した10代目理平の関与を彷彿とさせる。先行する在地窯（吉金窯・谷窯）にはない（あるいは希薄な)、京焼系の窯構築法や器種（煎茶碗＋急須、酒杯＋徳利、鉢）の存在は、監獄署での生産が在地の京・信楽系技術のみに立脚するのではないことを示唆する。

しかし同時に、監獄署の磁器が京焼の完全なコピーとはいえないことにも留意すべきであろう。10代目理平の関与があったとすれば、幕末期の理兵衛焼や幕末～近代の京焼の実態をより明確に把握した上で比較検討することが、理平の役割や指向性を考えるために必要な作業といえる。

3. 3. 監獄署窯の歴史的位置

監獄署での焼物生産の重要性は、それが西洋技術の導入に先行して在来の技術で行われた、「工業化」の試み、という点にあるといえよう。わずか４年程の操業であったが、ここでの試行が何を残したのか、明らかにしていく作業も残されている。



第 28 図　桶窯と間仕切り材

参考文献

東　信男 1997「讃岐の城郭石垣」『香川考古　第６号』香川考古刊行会
安藤文良 1981「」
伊藤（大）1996「煙管」『溜池遺跡－総理大臣官邸整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』都内遺跡調査会
稲垣正宏 2000「四国窯と信楽焼」『第２回　徳島城下町研究会　四国・淡路の陶磁器－生産と流通Ⅰ－』
上田秀夫 1991「16 世紀末から 17 世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究会』Ⅰ
大久保徹也 1995「基幹的灌漑水路と灌漑単位」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第六冊　上天神遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
大橋康二 2000「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会 10 周年記念』九州陶磁学会
小野正敏 1982「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究№.２』日本貿易陶磁研究会
尾上　実 1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』
荻野繁春 1990「『財産目録』に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 25 集
香川県立文書館 1998・1999『香川県立文書館資料集１・２　高松藩御令之内書抜上巻・下巻』
川畑　聡 1999「高松城東ノ丸出土丸瓦の変遷について」『（財）松平公益会事務所改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　高松城跡（作事丸）』
木立雅朗 1997「桶窯の民俗例－煙管状窯の焼成技術復原に向けての基礎作業－」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
北山健一郎 1999『香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
北山健一郎 1999「瓦の分類について」「軒平瓦の製作技法について」『香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡』香川埋文・県教委
北山健一郎・宮崎哲治 1998『高松港頭土地区画整理事業平成９年度埋蔵文化財発掘調査概報』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
木下晴一 1999「引田城下町の歴史地理学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅶ』
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会 10 周年記念』
京都府 1872「京都陶磁器説図」
蔵本晋司 1995『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成６年度』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
黒崎　直 1998『トイレ遺構の総合的研究－発掘された古代・中世トイレ遺構の検討－』奈良国立文化財研究所
小林謙一・佐川正敏 1989「平安時代～近世の軒丸瓦」『伊珂留我　10』
財団法人　小谷城郷土館 2000『シンポジウム　焼塩壷の旅ーものの始まり堺ー』
佐賀県立九州陶磁文化館 1984『国内出土の肥前陶磁』
佐川正敏 1992「江戸時代の瓦」『法隆寺の至宝－昭和資材帳－　第 15 巻』小学館
佐藤　隆 1999「陶器窯における生産と製品の系譜」『堂島蔵屋敷跡』（財）大阪市文化財協会
佐藤竜馬 2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
佐藤竜馬 2001a「高松城跡（西の丸町）の資料整理」『平成 12 年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告　浜ノ町遺跡・高松城跡（西の丸町）・西打遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
佐藤竜馬 2001b「瀬戸内沿岸地域からみた讃岐の焙烙」『第３回四国徳島城下町研究会　四国と周辺の土器－炮烙の生産と流通－』
佐藤竜馬 2002「伝右衛門・辰蔵そして新瓦町」『四国徳島城下町通信　第９号』
重松一義 1985『図鑑　日本の監獄史』雄山閣
渋谷葉子 1997「市ヶ谷邸の「御玄関」－構造と形式」『尾張藩上屋敷跡遺跡発掘調査概要　Ⅴ』東京都埋蔵文化財センター
白神典之 1992「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第 19 号
新宿区内藤町遺跡調査会 1992『東京都新宿区　内藤町遺跡』
鋤柄俊夫・森毅 1999「豊臣期大坂城跡における三ノ丸築造以前の基準資料」『大阪市文化財協会研究紀要』第２号大阪市文化財協会
陶山仁美・片桐孝浩 2000「香川県出土の貿易陶磁」『日本貿易陶磁研究会四国大会資料』
積山　洋 1994「消費地報告　大坂」『近世陶磁器の諸様相』関西近世考古学研究会
積山　洋 1995「近世大坂出土の土師質土器編年、素描」『大阪府埋蔵文化財協会　研究紀要３』
高橋　忠 1987『檀紙村誌』
高橋　学 1992「高松平野の地形環境」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
田島龍太ほか 1994『徳蔵谷遺跡（１）』唐津市教育委員会
谷口克広 2000『信長・秀吉と家臣たち』NHK 出版
東京大学埋蔵文化財調査室編 1990『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書３　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』
西山　　1996「下駄」『溜池遺跡－総理大臣官邸整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』都内遺跡調査会

中野高久 1998「江戸遺跡出土の在地系製品」『千駄ヶ谷五丁目遺跡の諸問題』千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
成瀬晃司 2000「江戸遺跡における実年代資料」『第 12 回　関西近世考古学研究会大会　近世の実年代資料』
難波洋三 1992「徳川大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究』第 9
乗岡　実 1996「岡山市近郊における近世瓦の生産と流通」『岡山市の近世寺社建築』岡山市教育委員会
乗岡　実 1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会
乗岡　実 1999「曹源寺の瓦と岡山藩の御用瓦師」『岡山市埋蔵文化財調査の概要　1997 年度』岡山市教育委員会
乗岡　実 2001a『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会
乗岡　実 2001b「林信男氏蒐集の考古資料Ⅰ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要　1999 年度』岡山市教育委員会
乗岡　実 2002「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査』
乗松真也・佐藤竜馬 2000「高松城跡における 16 世紀末葉～ 17 世紀の土器・陶磁器」
乗松真也編 2002 a『平成 13 年度高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告　高松城跡（丸の内地区）』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
乗松真也編 2002 b『平成 13 年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要　浜ノ町遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
橋本久和 1977『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
藤澤良祐 1987「本業焼の変遷（１）」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要　Ⅵ』瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐 1993『瀬戸市史　陶磁史篇』瀬戸市
古野徳久 2001『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅰ』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
藤村　泉 1991『武士の住まい』至文堂
藤好史郎・中西　昇 1996『高松港頭土地区画整理事業平成７年度埋蔵文化財発掘調査概報』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
藤好史郎・佐藤竜馬 1997『高松港頭土地区画整理事業平成８年度埋蔵文化財発掘調査概報』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
宝雲舎 1976『陶器全集　第四巻』思文閣
堀内秀樹 1997「東京大学本郷校内の遺跡における年代的考察」『東京大学校内遺跡調査研究年報Ⅰ　1996 年度』東
堀内秀樹 2000「江戸遺跡出土陶磁器の段階設定とその画期」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』
松本和彦・佐藤竜馬 2001「高松城出土土器・陶磁器の変遷　様相の把握」『第３回四国徳島城下町研究会　四国と周辺の土器－炮烙の生産と流通』
松本和彦 2001「高松城における土器・陶磁器の様相　高松城編年様相６の基準資料の紹介とその問題点」『四国徳島城下町通信』７号
松本和彦 2002 a「四国地方－香川県－」『第 12 回九州近世陶磁学会　国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる』九州近世陶磁学会
松本和彦 2002 b「高松城跡出土の京・信楽系陶器と理兵衛焼」四国城下町研究会 2002
松本和彦 2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
三浦正幸 1993「高松城」『復元大系　日本の城　7　南紀・四国』ぎょうせい
森下友子 1992「立地と環境」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　東山崎・水田遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
森下友子 1996「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要　Ⅳ』
森下友子 2000「富田－吉金窯跡－出土の様相」『第２回徳島城下町研究会　四国・淡路の陶磁器－生産と流通－』
森下友子 2002「紀太家由緒書と理兵衛焼」四国城下町研究会 2002
森島康雄 1992「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会
森田克行 1984『摂津　高槻城』高槻市教育委員会
森田　稔 1995「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
山本悦代 1993「吉備系土師器椀の成立と展開」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書　第６冊　鹿田遺跡３』岡山大学埋蔵文化財研究センター
山本悦代 1998「岡山南部における土師器鍋の変遷」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書　第 11 冊　鹿田遺跡４』岡山大学埋蔵文化財研究センター
山本信夫 1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世時研究会編
横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集４』
吉田伸之 2001「城下町の構造と展開」『新体系日本史６　都市社会史』山川出版
渡部明夫・真鍋昌宏ほか 1987『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』香川県教育委員会
渡辺浩一 1998「近世都市空間をめぐる住民結合と序列意識」『近世日本の都市と民衆』
渡辺　誠 1983「焼塩壺」『平安京土御門烏丸内裏跡－左京一條三坊九町－』（財）古代学協会

報告書抄録

ふりがな	たかまつじょうあと（にしのまるちょうちく）Ⅱ
書名	高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊
シリーズ番号	
編著者名	佐藤竜馬・金原正明・北野信彦
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒762-0024　香川県坂出市府中町字南谷 5001 － 4 電話　0877 － 48 － 2191
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
発行年月日	西暦 2003 年 3 月 28 日

総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数
560 頁	11 頁	221 頁	24 頁	304 頁	26 枚	28 枚	6 枚

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町	遺跡					
高松城跡（たかまつじょうあと） （西の丸町（にしのまるちょう）B地区（ちく））	香川県高松市西の丸町（かがわけんたかまつしにしのまるちょう）	37201		34 度 20 分 56 秒	134 度 2 分 56 秒	1995. 12. 1 ～ 1997. 3. 31	4,539 ㎡	サンポート高松総合整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高松城跡（たかまつじょうあと） （西の丸町（にしのまるちょう）B地区（ちく））	中世港湾 武家屋敷	中世前期 近世～近代	礫敷き・木組み遺構（中世） 掘立柱建物・礎石建物・柵列・トイレ遺構・井戸・石組溝・土坑（近世）	和泉型瓦器・楠葉型瓦器・京都系土師器・山茶碗（中世）肥前系陶磁器・備前系陶器・焼塩壺・近世瓦・「元和拾年」銘木簡（近世）監獄署生産の土器・陶磁器・製作道具・窯道具（近代）	中世前期（12 世紀）の港湾関連遺構、近世の屋敷地、近代監獄署施設を検出。また近世土器・陶磁器や、近世瓦の基準資料が出土。

サンポート高松総合整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第４冊

高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ
第１分冊

編集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
　　香川県坂出市府中町南谷5001番の４
発行　香川県教育委員会
　　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
印刷　ナカハタ印刷株式会社